はじめに（1/3）

本書のねらい

1．船の向きが変わった

今までの学習指導要領は、どちらかというと「教える内容中心」に整理されていた。教師の関心は「どう教えるか」にシフトされており、説明中心の授業（教師ファースト）が主流だった。

新学習指導要領では、観点別評価が３つ（知識・技能/思考力・判断力・表現力/主体的に学習に取り組む態度）に変更になった。学びを深めるのは学習者自身であり、教師はその「学びの場」を提供する責務（学習者ファースト）を負うことになる。船に例えるなら、「おもかじ」（右へ）や「とりかじ」（左へ）どころではなく、船首の向きが反対になったようなものである。

今回の改訂で授業が大きく様変わりするだろう。「知識・技能」では、指導すべきことは徹底し、必ずできるようにしてやらねばならない。それが土台となって、はじめて他の２つの観点が可能になる。「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」は、教師が教えられることではなく、児童生徒が自ら獲得していくものだからである。

2．幼児の言葉の学び方をTTで再現する

そもそも、言葉は文脈（場面や状況）でしか意味を持たない。幼児がことばを獲得する過程と同じように「言語は使いながら身につける」のが自然であり、大人が教えて覚えさせられるようなものではない。だとすると、授業で「何のために」という目的のないコミュニケーション活動を展開していても、言葉を身につけるには遠回りをしてしまうことになりかねない。教師は日常的に“Learning by doing.”（成すことによって学ぶ）を心がけることが大事になる。

特に、言葉の「学び方」を身につけるためには、生徒が自ら気づける場面を、教師が演出することが鍵になる。それに有効なのがALTとのTeam Teaching（以下TT）である。なぜなら、ALTは、生の英語を話し、異文化について学習者の視野を広げる格好の「生きた教材」だからである。

3．本書を使うとどんな授業になるのか

本書は、時代の趨勢に合わせて大きく変貌する英語教育に対して、不安を抱える英語教師を応援するために作られた。今まで「ALTとの効果的なTTのやり方がわからない」と悶々としていた教師の悩みを払拭するものになっている。

本書の執筆者たちは、令和３年度版 文部科学省検定中学校英語教科書の編集委員であり、ALTとのTTにおいて卓越した指導を展開してきたメンバーである。文部科学省の学習指導要領の作成に関わった者、JETプログラムの中間期セミナーの講師経験者も含め、多くは単著・共著を著し、教育雑誌や新聞などでも連載を担当している。つまり、日本の英語教育界を代表する実践家たちなのである。本書には、そのような彼らが惜しみなく出し合った知恵が詰まっている。生徒を夢中にさせる授業のノウハウがふんだんに盛り込まれているし、何よりも活動のネーミングを見ただけでワクワクする。

たとえば、「ダウト！」「マイシークレット」「食べられてしまったアップルパイの謎を解け」（以上１年生）「占い師になーれ」「日本人はどうして●●なの？」「国が違えばルールも違う」（以上２年生）「あの名前なんだっけ？」「英語俳句王は誰だ？！」「感謝を込めてALTに送るプレゼント」（以上３年生）等である。

このような活動が本書には90本！入っている。TTの事例集であると同時に、プロ教師たちの授業デザインや授業マネジメントのコツを盗むにはもってこいの「宝箱」である。

現場では「教科書通りにやりたくない」と、Teacher's Manual（以下TM）をほとんど開かずに授業をしている教師がいる。しかし、それは「学習指導要領」に記載されている、「付けなければならない力」への意識を軽んじて、自分がやりたい授業、無手勝流の授業をしていることに他ならない。中学校３カ年の学習が終了したときに生徒たちが見せる姿（何ができるようになり、何ができるようにならなかったのか）は、教師の指導の結果と謙虚に受け止めることが大事である。

はじめに（2/3）

TMは羅針盤であり、編集著者であるプロ教師たちが学習指導案のモデルを書いている。TMには授業作りのヒントが数多く隠れているのである。騙されたと思って一読されることを勧める。本書も然り。自分の経験値だけで「できそうな活動」を選んだり、自分のクラスの生徒には無理だからと内容を簡単にしたり、途中のステップを抜いたりするのではなく、一つのパッケージとして扱いたい。授業において大事なのは段取り（順序）であり、肝心な指導が一つでも抜けてしまうと、せっかくの言語活動が台無しになってしまうからである。

実際に、いくつかの活動に取り組んでみてほしい。なぜ今までTTがしっくりいかなかったのか、その原因が、霧が晴れるように見えてくるだろう。そして活動中に生徒たちが見せる表情の変化から気づいたこと（人がやる気になる原理原則）を活かせば、他の授業においても同じように生徒たちがワクワクする展開ができるようになるはずである。

４．教師はTTでactivatorになろう

TTで必要なのはactivateである。COBUILDにはこう書かれている。If a device or process is activated, something causes it to start working. このsomethingはTTに置き換えることができる。start working（機能し始める）の対象は、生徒のコミュニケーション能力だからである。

本書も、TTをactivateさせる目的で作られている。もし、採択されている教科書で探したいTTの指導案が見つからなくても、巻末の索引（文法事項別）で他教科書の事例や関心のある事例を見つけて読んでいただきたい。きっと、「そうか、そういうことか！」「なるほど、こういう入り方もあるのか」「このような展開は考えたこともなかった」「これなら、ALTも意気に感じてやってくれそうだ」「自分も生徒になって受けてみたい」等々、脳に具体的なイメージが浮かんできて、すぐにでも授業がしたくてたまらなくなるだろう。

冒頭で述べたように、本書は６つの教科書のTT案を６人のプロ教師にお願いをして執筆していただいた。合作というよりも競作である。つまり、名コック６者６様の味つけが楽しめるということである。読んでいただくと、バリエーションの中に個性を感じていただけるだろう。授業では、教師の個性が眩しく輝いてこそ、生徒がそれによい影響を受け、自律的学習者に育っていく。ワクワクする授業こそが、究極の生徒指導なのである。本書が、TTだけでなく、読者の皆さんの「なんだか、最近、授業が楽しくなってきた」という自信につながることを心から願っている。

本書活用のポイント

何かの取扱説明書を読むときは、組み立て方、使い方などに目が向かうことが多い。案外、抜けてしまうのが、注意事項（配慮すること）やFAQである。その結果、「途中で困った」という状況が起こることがある。ここでは、本書の使い方だけでなくTTにおける“Dos & Don'ts”も併せて紹介しておくので、TTの授業作りの参考にしていただければ幸いである。

TTにおける“Dos & Don'ts”

１）「ねらい」（どんな力をつけるための活動か）を熟読する

活動の内容や50分をどう進めるかという手順が大事なのではなく、何よりも大事なのは、それぞれの活動の「ねらい」である。それを、最初にきちんと生徒たちに伝えておきたい。最後はどうなるのかという「ゴール」を示し、見通しを持たせることで、生徒は適切に振り返ることができるようになる。また、その授業を通してどんなことができるようになってほしいか、どんなことに挑戦してほしいかについても、期待を込めて語っておきたい。もちろん、大切な“同僚”であるALTとも事前に本書を読んで、落とし所を確認しておきたい。

２）ALTを一人の人間として尊敬し、その心情を大切にする

TTでは、日本人教師自身がALTの立場に立って、その役割を考えたときに、「楽しい」「任されている」と感じられる活動になっているがどうかが大事である。ALTが授業をすすめるときは、任せっぱなしにするのではなく、フォローを

はじめに（3/3）

したり、授業中の生徒の動きに合わせて臨機応変にアドリブを効かせ、互いに修正をかけたりしていくことが大切である。教師たちが共同（時間や活動の分担）ではなく、協働（互いによい影響を与え合う）することで、TTが生徒たちにとって「互恵学習」になるようにしたい。そうすれば、ALTがHuman Tape Recorderを演じたり、人工衛星のようにただ教室を回ったりすることがなくて、ボーッとして立っていたりする、といった事態は起こらないはずである。

３）基本的に、指導案の「流れ」は変えない

クラスの実態を踏まえて、時間をフレキシブルにする、内容を部分的にアレンジすることは可能だが、「うちのクラスでは難しい」とか「無理だろう」と教師が勝手に判断して、途中の活動を抜いたり、簡単にしたりしないようにしたい。ピースが１つでも欠けると「ジグソーパズル」の絵は完成しないからである。また、生徒のポテンシャルは教師が想像する以上に高く、「今までやったことがない」という判断で彼らの可能性を摘んでしまっては、伸びるものも伸びていかない。ぜひ、今まで見たこともないような彼らの姿を目に焼き付けていただきたい。

４）授業中に気づいたことは、必ずメモを取る

授業中、ハッとしたことこそが、今まで気づかなかった自分の授業の改善点である。よって、１時間に１枚の小さなカード（表にはプラスの要素、裏にはマイナスの要素）を用意し、JTEもALTも授業で気づいたことをメモしておきたい。そして、職員室に戻りながら、それを見せ合って振り返りをしておく。授業が時間通りにうまく行ったかどうかではなく、お互いの関わり方や、次のTTへの課題を話し合っておきたい。なお、メモは蓄積しておき、５）につなげる。

５） 事前の打ち合わせよりも「振り返り」に時間をかける

TTの授業は事前の打ち合わせに時間をかけることが多い。それは50分を円滑に進めたいという願いからである。しかし、残念ながら終わった後「TTをどう改善するか」に向けての話し合いは、時間をとって丁寧にされていないように思う。やったとしても、他のクラスの授業で部分的に修正することの確認程度であろう。 ４）で日常的に書き溜めてきた二人のメモを全て並べて、TTのあり方について「振り返り」をしたい。時間は１時間限定。だが、それはTTを盤石にするための「黄金の１時間」である。

６）本書の活用をきっかけにALTが生徒にとって、より身近な存在になるようにする

本書に紹介されている活動をALTと共に行うことをきっかけに、さらには定期テスト、パフォーマンステスト、長文読解の英文作り、英作文の添削などにも積極的に巻き込み、真の同僚（colleague）として「責任」を分かち合いたい。経験値さえ上がれば、ALTはいろんなアイデアを提供してくれるようになる。たとえば、お昼の校内放送のDJ、ALTと生徒の交換グループノート（ノートを3分の１に裁断したリレーノート）、ALTのアイデアによる学年集会の企画、ディベート大会、ハードカバーの卒業文集作り、などである。生徒にとってALTが身近な存在になれば、英語好きが加速度的に増えていく。実際に、生徒たちの中には、本国に帰ったALTと継続して連絡を取り合い、高校生になって留学をしたときに再会を果たした者もいる。ある生徒は、日本に帰国後、「将来、もっと英語と関わって周りの人を幸せにしたい」という願いを熱く語っていた。

多忙な日々の生活の中で、悩み、不安や不満もあるかもしれない。しかし、教師はこのように、関わった生徒たちの夢づくりを手伝うことができるのである。なんと幸せなことだろう。目先のことでクヨクヨせずに、まずはTTの授業で元気になろう。あの子たちが待っている。

関西外国語大学　英語国際学部　教授
中嶋　洋一